主日礼拝説教「あなたをブランディング」

日本基督教団石神井教会　2019年9月22日

【旧約聖書日課】サムエル記下　18章31節～19章1節

18[31]そこへクシュ人が到着した。彼は言った。「主君、王よ、良い知らせをお
聞きください。主は、今日あなたに逆らって立った者どもの手からあなたを救っ
てくださいました。」[32]王はクシュ人に、「若者アブサロムは無事か」と尋ねた。
クシュ人は答えた。「主君、王の敵、あなたに危害を与えようと逆らって立った
者はことごとく、あの若者のようになりますように。」
19[1]ダビデは身を震わせ、城門の上の部屋に上って泣いた。彼は上りながらこう
言った。「わたしの息子アブサロムよ、わたしの息子よ。わたしの息子アブサロ
ムよ、わたしがお前に代わって死ねばよかった。アブサロム、わたしの息子よ、
わたしの息子よ。」

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙　6章14～18節

[14]しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、
誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、
わたしは世に対してはりつけにされているのです。[15]割礼の有無は問題ではなく、
大切なのは、新しく創造されることです。[16]このような原理に従って生きていく
人の上に、つまり、神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように。[17]これか
らは、だれもわたしを煩わさないでほしい。わたしは、イエスの焼き印を身に受
けているのです。[18]兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あな
たがたの霊と共にあるように、アーメン。

【福音書日課】ルカによる福音書　14章25～35節

[25]大勢の群衆が一緒について来たが、イエスは振り向いて言われた。[26]「もし、
だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に
自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。[27]
自分の十字架を背負ってついて来る者でなければ、だれであれ、わたしの弟子で
はありえない。[28]あなたがたのうち、塔を建てようとするとき、造り上げるのに
十分な費用があるかどうか、まず腰をすえて計算しない者がいるだろうか。[29]そ
うしないと、土台を築いただけで完成できず、見ていた人々は皆あざけって、[30]
『あの人は建て始めたが、完成することはできなかった』と言うだろう。[31]また、
どんな王でも、ほかの王と戦いに行こうとするときは、二万の兵を率いて進軍し
て来る敵を、自分の一万の兵で迎え撃つことができるかどうか、まず腰をすえて
考えてみないだろうか。[32]もしできないと分かれば、敵がまだ遠方にいる間に使
節を送って、和を求めるだろう。[33]だから、同じように、自分の持ち物を一切捨
てないならば、あなたがたのだれ一人としてわたしの弟子ではありえない。」
[34]「確かに塩は良いものだ。だが、塩も塩気がなくなれば、その塩は何によっ
て味が付けられようか。[35]畑にも肥料にも、役立たず、外に投げ捨てられるだけ
だ。聞く耳のある者は聞きなさい。」

大宴会への招きと主イエスの弟子

教会は、年末まで続く多くの行事を通して、さまざまな方々をお迎えする機会の増す季節を迎えています。そのための備えをすでに始めてくださっている奉仕者がありますが、教会の皆さんには、ぜひ心していただきたいことがあります。どの行事に際しても、皆さん一人ひとりが、お客としてではなく、迎える側のホストとして臨んでいただきたいのです。それは、準備や当日の奉仕者としてお手伝いをしてくださいというだけのことではありません。その行事に、一人でも二人でも、どなたかをお連れいただきたいのです。大勢である必要はありません。「一人が一人をキリストのもとへ」とお連れする思いで、家族の一人か、知人の一人かをぜひお誘いになって、おいでいただきたいのです。

先週の福音書日課（ルカ 14:7~14）で、主イエスは、「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。…むしろ、貧しい人、身体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい」とお教えでした。その後、主イエスは、今日の福音書日課（14:25 以下）の前に、「大宴会のたとえ」をお語りになって、「神の国はこういうところだ」ということをお教えくださっています。そこでは、宴会に招かれていた人たちが時刻になっても集まって来ない事態を迎えて、主人が僕に「急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」（14:21）と命ずるのですが、それでも空いた席があると、主人はさらに「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ」（14:23）と僕に頼んだとあります。

教会を神の国の初穂としてお立てくださった神が、わたしたちにも同じように命じられ、また願われていると、主イエスは神の御心をお教えくださったのです。主イエスの教えで「友人や兄弟を呼んではいけないかな」と思わされるところもあるかもしれませんが、「無理にでも、誰でも、連れて来てほしい」との切なる思いをお示しくださっているのですから、たとえ家族や友人であっても、連れて来ないよりは、連れて来た方がよいに決まっています。いいえ、本当に主イエスが願われていることは、そういう家族や友人をこそ、ただ身内だから、仲間だからという理由ではなく、一人の人、神に愛された、しかし神から遠く離れた所に置かれている一人の人として、教会にお迎えし、キリストのもとにお連れすることにあるのではないでしょうか。

今日の福音書日課は、何か場面が突然変わったような翻訳になっていますが、おそらく、14 章冒頭から始まった「安息日の食事の会」の場面の続きです。その食事会に招かれてきた人たちや、招いてくれた人に向かってお話しされていた主イエスは、「大宴会のたとえ」を語り終えられたところで、ご自分と旅を一緒にしてきて、この食事の席にも一緒に加わっていた大勢の取り巻きのほうに顔を向けられて、あらためてお語りになられたのです。大宴会にたとえられる神の国のために弟子として主イエスに従おうとしていた人々に、神の国にふさわしい弟子のあり方を心に留めさせようとなさったのでしょう。

愛か、憎しみか？

主イエスは、「**…わたしの弟子ではありえない**」と三度繰り返されて、ご自身に従う弟子がどのような者であるべきかを、思い起こさせられました。すでに他の場面でもお教えになられていたことを繰り返されたようです。いわく、「身内や自分の命を憎むべし」、「自分の十字架を背負ってついて来るべし」、「自分の持ち物を一切捨てるべし」と。

いつもながら、主イエスの弟子に求められる覚悟は厳しいものがあると受けとめられた方も、少なくないでしょう。主イエスは、ご自分の弟子に対して、どうも、いつも厳しい覚悟を求めていらっしゃるように見えます。今日の主イエスの御言葉を聞いても、「ああ、わたしは、自分が主イエスの弟子とは、口が裂けても言えない」と内心思われていらっしゃる方が、あるのではないでしょうか。新共同訳聖書に「弟子の条件」などと見出しを付けられてしまうと、なおさら、そういう思いを深めてしまいます。

けれども、主イエスは、本当に、わたしたちが弟子として生きていく上で、厳しい覚悟を求められていらっしゃるのでしょうか。それを弟子としての条件となさるとおっしゃっているのでしょうか。その覚悟ができない者は、振るい落としてしまわれるというのでしょうか。条件に合わない弟子は、ただお情けで末席を汚すだけの者として扱われるというのでしょうか。

主イエスは、この教えを、食事の席でお語りになられました。《神の国》を指し示すことになる食事の席を、どのように設けるべきかとお教えになられていたときのことです。家族にしろ知人にしろ、食事に招いたら、いずれお返しをしてくれるような人のことは招くなと、お教えになられていたのです。むしろ、お返しができない人のことを招けと、お教えになられていたのです。それは、《神の国》においては、すべての人が神に招かれた客人として席を埋めるように招かれているからこそのことであったでしょう。《神の国》では、わたしたちの行動が、お返しをし合う関係の中で完結することは、ありえないのです。むしろ、「お返しし合う関係」を意図的に封じることさえして、開かれた関係を常に生み出していくように行動するのです。すべての人が、最後の一人まで、《神の国》の食事の席に連れて来られるようになるための、極めて具体的な方法を、主イエスはお教えになられていたのではなかったでしょうか。

主イエスが、弟子のあり方として、身内の者や自分の命をも「憎むべし」とお教えになられたのも、決して、身内の者と対立したり、自分の命を粗末にしたりするようなことを示唆されているのではないはずです。わたしたちは、普通は、身内の者を他の者よりも大事にするのです。憎しみ合う家族よりも、愛し合う家族でありたいと願います。ときには、周囲の目を気にして、愛し合う家族を装うことさえするでしょう。それほどに、家族身内は「愛する」ことと結びついています。実際には、家族身内同士でも、愛し合うことができず、憎しみ合うことがあります。旧約日課のダビデ王と息子アブサロムの物語も然り、旧約聖書は、家族の関係が破綻する現実を、嫌というほど描いているのです。

主イエスの《焼き印》を身に帯びて

主イエスは、その家族身内との関係を、自然的な「愛」からではなく、建前の「愛し合い」でもなく、「憎しみ合い」というところから始めて、新しい関係に建て直すことをお教えになられているのではないでしょうか。いいえ、すべての人との関係において、わたしたちの中にある「憎しみ」をしっかり見つめ、目を背けることなく、しかしそこから始めて、新しい関係、《神の国》に生きる者としての新しい関係を建て直すように、主イエスは、わたしたちを導いてくださっているのではないでしょうか。

主イエスの教えを振り返ってみるとき、思い出さなければいけない御言葉があります。「人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである」（ルカ 6:22）。人に憎まれることが、あなたがたの幸いになるとおっしゃられる。もちろん、ただそれを忍耐すれば心の強い人間になる、というようなことではありません。それは、新しい関係を始めるきっかけになるのです。

だから、主イエスは、こう続けられました。「敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にしなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい」（同 6:29）。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあろうか。…自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。…あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる。…あなたがたの父が憐み深いように、あなたがたも憐み深い者となりなさい」（同 6:32~36）。

わたしたちには、主イエスと共に《神の国》を建て始めるという大きな使命が、託されているのです。それは、神の御心から始められた計画です。神の御心を行う者が為し遂げる計画です。すべての者が神の御心を行う者になったときに完成する計画です。だから今は、この未完成の計画が地上で進められるための教会が、キリストの教会が、建てられているのです。わたしたち、主に導かれ、主と共にこの計画に参与する者が集められた教会が、建てられているのです。

この計画は、身内を愛し、自分を愛して得られる小さな平安では、決して完成しません。身内を憎み、自分の命をさえ憎み、憎しみ合う者たちの現実の中にわたしたちが出て行ったときに、そして、そこにいる人々を愛し、彼らに手を差し伸べ、彼らのために祈り、いつか彼らをキリストのもとにお連れし、神の国の宴会に加わる者となるまでに至ったときに、すべての人がそのようになったときに、完成するのです。

この使命を身に負っている者として、使徒パウロは、「**新しく創造され…。イエスの焼き印を身に受けている**」と言いました。パウロもまた、「自分の十字架を背負ってついて来なさい」との主の呼びかけを、教会を通して聞いた一人でした。わたしたちも、そのパウロと共に、新しい「イエスの焼き印」を身に帯びた者として、「憎しみ合う」人々の現実の中へと出て行くのです。